

令和元年度

板橋区総合教育会議

令和元年9月5日

板橋区 総務課

令和元年度板橋区総合教育会議

日 時 令和元年9月5日(木)
開 会 午前10時30分
閉 会 午後0時20分
場 所 板橋区役所北館11階 第三委員会室

出席者

区 長	坂本 健
教育長	中川 修一
教育長職務代理者	高野 佐紀子
教 育 委 員	青木 義男
教 育 委 員	松澤 智昭
教 育 委 員	長沼 豊

出席した事務局職員

政策経営部長	堺 由隆
政策企画課長	篠田 聡
総務部長	森 弘
総務課長	織原 真理子
教育委員会事務局次長	藤田 浩二郎
地域教育力担当部長	松田 玲子
教育総務課長	木曾 博
学務課長	星野 邦彦
指導室長	門野 吉保
新しい学校づくり課長	渡辺 五樹
学校配置調整担当課長	大森 恒二
施設整備担当副参事	千葉 亨二
生涯学習課長	水野 博史
地域教育力推進課長	諸橋 達昭
教育支援センター所長	平沢 安正
中央図書館長	大橋 薫
成増ヶ丘小学校長	西谷 秀幸

議 題 等

- 1 開 会
- 2 区長挨拶
- 3 議 題
魅力ある教育の推進について
(1) 「いたばし学び支援プラン2021」における重点課題
(2) 板橋区立学校における教職員の働き方改革について
(3) 教育環境のICT化と魅力ある教育について
- 4 閉 会

【坂本区長】

本日は、お忙しい中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。

ただいまから、令和元年度板橋区総合教育会議を開会いたします。

中川教育長、また教育委員の皆様、日頃から板橋区の教育の伸長発展にご尽力をいただき、誠にありがとうございます。

「総合教育会議」は、平成27年度の「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正において、教育の政治的中立性、継続性、安定性を確保しながら、首長と教育委員会の連携体制の強化を図るために設けられました。

会議におきましては、首長と教育委員会が教育行政の大綱や重点的に講ずるべき施策等について、協議・調整を行い、両者が教育政策の方向性を共有しながら、一致して執行に当たることが期待されております。

それでは、会議に先立ちまして、本日の議題であります「魅力ある教育」に関して、私の方から少しお話をさせていただきます。

平成28年の1月に教育委員会の皆様とともに制定させていただきました「板橋区教育大綱」は、板橋区基本構想におけるおおむね10年後のあるべき姿「魅力ある学び支援」ビジョンと、基本的な方向性を一致させた内容となっております。

「魅力ある学び支援」ビジョンのあるべき姿とは、「安心・安全で魅力的な学校環境の中で、学校・家庭・地域が連携して子どもを育てる姿」、「教員が研究・研修に励み、子どもたちと向き合い、魅力ある学校づくりが進んでいる姿」、そして「生涯を通じて学び、教え合う環境が整い、良好なコミュニティが形成されている姿」これらをイメージしております。

私は常々、「若い世代に選ばれ、長く住み続けたくなるまち板橋をめざす」ことを標榜しておりますが、そのためには、子どもたちにとっても、保護者や地域の皆様にとりまして、「魅力ある教育」が展開されることが何よりも重要であると考えています。

「板橋区教育大綱」や「魅力ある学び支援」ビジョンの実現に向けた具体的な取組は、本年新たに策定されました教育に関する第2期実施計画「いたばし学び支援プラン2021」に示されています。

本日の会議では、当該プランにおける3つの柱に関する今後の展望と、「魅力ある教育」のあり方について協議してまいります。

教育委員の皆さんにおきまして、様々な切り口によって教育行政の発展に資するご意見を頂戴したいと考えております。

それでは、「いたばし学び支援プラン2021における重点課題」について、「学校における働き方改革について」、また「教育環境のICT化と魅力ある教育について」を事務局並びに板橋区立成増ヶ丘小学校、西谷校長先生から説明をお願い申し上げます。

【教育総務課長】

教育総務課長です。

それでは、資料1、「“学びのまち”「教育の板橋」の実現に向けて～」を基に、「いたばし学び支援プラン2021」の重点課題等について、説明いたします。

社会の変化を見据えた課題等へ対応するため、3年間で取り組む3つの柱を設定いたしました。

図の左側から、学校では保幼小接続・小中一貫教育の推進により、義務教育9年間を通して学力の定着向上をめざします。

同時に、教職員の働き方改革により、質の高い教育を提供し、図の中心にあります「板橋区コミュニティ・スクール（iCS）の導入」により地域とともにある学校をめざします。

この3つの柱を中心に施策展開することにより、図の右側にあります、学校と地域それぞれに、記述にあるような多様な効果をもたらすというイメージを描いております。

図の右上には、『SDGsの目標を見据えた「教育の推進」』とありますが、SDGsにおいて教育が「目標4」に位置付けられております。

身近な課題について、地域等と協働により解決を図っていくという、「ESD（持続可能な発展のための教育）」の視点も、SDGsの達成に貢献するものであり、iCSの取組にも通じるものと考えております。

図、左側に戻って3つの柱の課題という点では、特に（※）を付したものについては検討を重ねていきたいと考えております。

「教職員の働き方改革」の取組や、その他の事業における学校のICT化の課題、そして、図の中央下部にあるように「地域」の課題として、「地域人材の重なりへの対応」があると捉えております。

以上が、資料1の説明になります。

続けて、本年3月に策定した「教職員の働き方改革プラン2021」の取組状況について、資料2により説明いたします。

資料上段にあるとおり、板橋区における先生方の在校時間は、いわゆる過労死ラインと言われる60時間を超える者が多数おります。

公立学校の教員は、法律に基づき給料の4%の教職調整額の上乗せ支給がある一方で、どれだけ残業しても残業手当は一切支給されません。

資料左側上部、重点施策1をご覧ください、このような背景もあり、これまで学校にはタイムカードなどがなく、出退勤の時間を把握していませんでした。

今年度、全区立学校へICカードによる在校時間を把握できるシステムを導入しております。在校時間の客観的な把握を契機として、先生方の意識改革につなげると同時に、仕事の見直しのきっかけとなるよう期待しております。

現在、放課後の電話対応に対し、重点施策1にあるとおり、「自動応答装置の設置事業」を小中学校5校でモデル実施をしております。

放課後に児童等の指導や教材準備に集中できるとの報告を受けており、早期の全校設置が望ましいと考えております。

次に、重点施策2に移り、働き方改革プランを契機に今年度から多数の学校において、定時退庁日を設定する取組を開始し、夏休み中において全ての公立学校園で完全休校日を実施いたしました。

資料右側上部、重点施策4に移り、さらに部活動指針の改訂による週2日以上 of 休養日などを実施しております。

これらの取組は、「子どものためなら」と「早朝から夜半までの勤務」または「土日勤務」もいとわないという、これまでの先生方のイメージとは異なるかもしれません。

今までのような先生方の献身的な働き方に頼るばかりでは、公立学校の持続的な運営に支障があると考えております。

ここまでの、時間管理の適正化と教員の意識改革に関する取組になりますが、これだけで長時間勤務を解消することは困難であり、さらなる取組が必要と考えます。

重点施策5に移り、学校にはこれまでも様々な専門スタッフが配置されておりますが、それでも長時間勤務の状況は解消されていないというのが現状です。

そのような現状から、近年、多くの自治体において教員をサポートする専門スタッフの配置がなされております。

また、複雑・多様化する学校課題に対応するため、スクールロイヤー等、法律相談の重要性が高まるばかりです。

本区においても、一歩進んだ取組が必要と考えております。

今後も、「教職員の働き方改革プラン2021」を着実に進め、先生方が子どもと向き合う

時間を確保し、一層の授業の質の向上を図りたいと考えております。

雑駁ですが、私からは以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

【教育支援センター所長】

教育支援センター所長でございます。

【坂本区長】

お願いします。

【教育支援センター所長】

それでは、私から本区の公立学校におけますICT化の現状、それから今後の方向性について、ご報告をさせていただきたいと思っております。

資料3をご覧くださいと思います。

最初に、なぜICT化を進めることが必要なのかという点で並べました。

SDGsは、「誰ひとり取り残さないということをめざして、先進国と途上国が一丸となって達成すべき目標」で構成されています。

文科省ユネスコスクール運営委員会報告によれば、その第4の目標「教育の質の向上」、これは全てのSDGsの基礎と位置付けられております。

今、学校で学ぶ子どもたちが2030年の社会を力強く生き抜き、板橋区の将来を築き、支えるために求められる力とは、さらに進化する「AI」を活用する力と、読み解く力など「AI」では代替できない力だと思います。

この2つの力を授業を通して育成するためには、教育のICT環境を充実させることは欠かすことはできません。

教育のICT環境として、タブレット等のハード環境だけでなく、様々な関連ソフト、アプリなどを活用できるインフラ設備も求められていると考えられております。

その将来像として、1人1台の教育環境ということで、既に実践研究がございますので、それを少しご紹介いたします。

資料3の2番目の項目になります。

民主党政権時に総務省事業として始まり、自民政権になって、文科省「学びのイノベーション事業」になったものがございます。

フューチャースクール事業と呼ばれているものでございます。

平成22年から全国10校の学校を指定し、児童・生徒、1人1台、タブレットPCを配付して、授業検証と全国学力調査の相関をとった研究でございます。

その結果につきましては、報告書によれば学力向上への相関は見てとれるということがありました。

さらには、これからのAI化に向けてデジタル教科書を用いた授業の実践への布石ともなりました。

その報告書になった実際の学力調査の結果でございますが、「学習意欲の向上」、「分かったという実感」のアンケートに関して、高い数値が出ています。

それから、学力調査の実際の結果ですと、小学校では学習の下位層が減っている。

中学校では、上位層が伸びたという結果が得られています。

さらに、指導用のデジタル教科書の活用効果についてもアンケート等での成果が報告されています。

資料3の項目3番は、平成30年度に示されました文科省のICT環境整備方針と本区のICT環境整備状況を比較したものでございます。

ICT環境整備の方向性につきましては、区のICT推進計画に則り、次年度新たなICT教育推進計画を策定し、計画的に整備及びその活用を進めていきたいと考えています。

特に、来年度からは小学校においてプログラミング学習が導入され、デジタルネイティブといわれる次世代の新たな教育の展開が開始されます。

その今こそ、区としてどのように教育においてICT環境を整備するかという姿勢が問われていると考えています。

議会からも、複数の会派からプログラミング学習、またはICT環境に関する問い合わせもいただいております、次の区議会第3回定例会での質問に備えているところでございます。

授業の視点からいきますと、タブレット・PCの導入、電子黒板の整備、ネット環境などのハード面の充実、デジタル教科書、学習コンテンツの共有、学習アプリ等の開発などのソフト面の充実、また、働き方改革の視点でいきますと、教員用PCの充実、校務支援システムの充実、ホームページ等の情報発信環境の充実などが、今後、進められる必要があるかと考えてございます。

私からは以上でございます。

【坂本区長】

ありがとうございました。

続いて。

【西谷成増ヶ丘小学校長】

成増ヶ丘小学校の校長の西谷と申します。よろしくお願いいたします。

私の方からは、本校で取り組んでおりますプログラミング教育及び、参加しておりますファーストレゴリーグのご報告をさせていただきます。

まずは、こちらの動画の方をご覧ください。

(動画上映)

今年の6月に2年生で行った授業、P E T Sと呼ばれる箱型のロボットなのですが、パソコンを使わないでブロックを1つ1つ入れて動かしていくというものです。

子どもたちはバーチャルの世界に慣れている中で、物が動くということに非常に目を輝かせます。それをすごく授業をやりながらみんなで感じているところでもあります。

とにかく、物が動くってこんなに子どもたちが変わるのだということを感じております。

それから、ただロボットを動かすだけではなくて、子どもたちが考えたところをちゃんと目に見えるようにしています。例えば、ホワイトボードに、「丸くしてあるところは、繰り返しボタンをここで使うといいね」というのを書き出し、みんなで話し合いながら考えていくということで、協働学習の意味もあります。

本校では、このP E T Sといわれるものを1、2年生で行いまして、3年生からタブレット上でスクラッチというものを動かし、さらにそれを発展させて、レゴでのロボットでということで、系統的に学ぶようにしております。

こちらの動画は、昨年度の12月に行った6年生の授業です。

(動画上映)

レゴのロボットを動かしているのですが、去年はこのようなレベルでした。今年は、去年のレベルよりは高いレベルでできるなとか、逆にこのくらいだったら4年生ぐらいでできそうだなというふうに考えて進めています。

先ほどもありましたが、ホワイトボードに書き出すことで、ここが違うよねということで、みんなで試行錯誤しながら目に見える化をして、トライ&エラーをしながら、命令をパソコンでし、一人の子がパソコンをいじるのではなくて、みんなで考えられるというところでプログラミング教育にかなり意義があるなというふうに思っています。

研究主題は、「プログラミングで賢くなります」ということで進めているのですが、たまたま研究主任のクラスが、今回、都の学力テストで、そのクラスだけが低かったのも、プログラミ

ング教育は読み解く力につながらないのかということも、もう一点考えていければと、検証できるかどうか分からないのですが、そのように思っております。

改めて、プログラミング教育の必要性の一つとして、子どもがトライ&エラーを繰り返しながら学習していくこと。失敗は恥ずかしくないのです、プログラミングは。

なので、それを繰り返す中で、プログラミング的思考力を育成していく、何よりも、これから子どもたちが大きくなった時代のSociety 5.0の時代に、世の中のものがプログラミングでできておりますので、この生活をより豊かにしていく、そういう力をつけていかなければいけないですし、逆に言えば、今このプログラミングされている世の中の仕組みを子どもたちが知らないと、やっぱり将来生きていけないんじゃないかという、そういうことを感じております。

あと、海外に行かせていただきまして、力を入れている外国との差というのを非常に感じました。将来は、国力にもこれはつながるのではないかなというふうに私は感じております。

続きまして、5月に行かせていただきましたトルコでの、ファーストレゴリーグの様子をお話させていただきます。

FLL、ファーストレゴリーグでは、ロボット競技だけではなく3種類のプレゼンを行うこととなります。

ロボットだけだったら好きな子はいるのですけれども、このプレゼンが非常に難しく、チームの紹介をするコアバリュー、研究成果を発表するプロジェクト、そして、どのようなロボットをつくって、どのようなプログラムをつくって、どのような戦略で今回はロボット競技を行うかというロボットデザインです。

特に、プロジェクトは自分たちで課題を見つけ、調べ、専門家に聞き、さらに専門家から聞いたことを改善して、また専門家に聞き、そして発表するというので、大変高度なことをやっています。

チーム紹介のコアバリューにも、本校のチームでも、一度チームの子どもたちが喧嘩して分解しかけたりもしたのですが、そこからまた立ち直ったというところもあります。ここが非常に大きな学習になっています。

ファーストレゴリーグは、9歳から16歳まで参加できるので、小学生が出るということは非常にきついのですが、それなりに効果があると感じています。

予選であった東日本大会では、Team Spirit Awardというコアバリューでの賞をいただきました。

本校のチームは、プロジェクトとして、精神的な問題が宇宙に行くと問題なのじゃないかと考え、結局、地球でやっていることをそのまま宇宙に持っていくのがいいんじゃないのという事で、提案させていただきました。

VRを使って、色々なところを地球にいるように旅ができるようにする、自分の部屋で寝たようにできるとか、そういうような提案をしております。

また、世界大会にも出場させていただきました。

これが先日のトルコオープンなのですが、優勝したのが韓国で、3位も韓国でした。

つまり、国を挙げて力を上げているチームは非常に強いなということを感じました。

ここでロボット大会の、ロボットの競技の様子を。

(動画上映)

これは本番で上手くいかなかったので、本番の後で練習をしているところなのですが、今、1回倒して戻ろうとしている。

今度は、真ん中のあたりで回転するのですが、1回失敗して、もう1回やり直すところです。

ひっかかって、やり直しをして、失敗をしてもとにかく繰り返しやり直す。これは2年間で、ゼロだった状態からここまでできるようになりました。

時間がないので、この後は端折らせていただきますが、このような形でロボットをしました。

それから、プレゼンは、海外では英語でプレゼンなので、必死になって子どもたちは英語で覚えました。これは最初の部分だけ。

(動画上映)

あと、ピットというのがありまして、ここで色々な外国とのチームと交流ができるのですが、この交流がすごい子どもたちにとって魅力的で、トルコだったということもあって、トルコの方がたくさん来てくださいました。

最初は、何をしゃべっているのという様子でしたが、最終的に、自分たちで大人も関係なく積極的に片言の英語でやっていました。

例えば、外国の方に名前を書いてもらって、それを無理やり漢字にして、プレゼントして返すのです。

たくさんトルコの方が、大好きな日本の文化がここにあると言ってきて、トルコという国はいい国だなと改めて思っています。

それから、現地の人たちとこうやって遊んだりとか、インドの方が来てくれたりとか、ボラティアの方とかと写真を撮ったりしたのですが、日本の文化を非常に喜んでいました。

現地のチームの方が一緒にご飯を食べようということで食べたのですが、色々と話を聞いていたら、そのチームの人たちは学校が週1日英語の日があって、一切トルコ語をしゃべらないで生活する、そのぐらいしないと英語はできないのかなというのを思った次第です。

また、旗にもメッセージを書いていただいたり、FLLとして、最初のコアバリューではありますが、とにかく仲間と協力して最後まで、ここには必ず上手くいかないこともあるのですが、それを乗り越えるというところ。自ら課題を見つけ、調査して、これはもう本当に、総合的な学習の、小学校では比にならないぐらいの調べ活動をしています。

海外の世界大会に行くことができれば、英語力・コミュニケーション力が非常に大きくなるなどということを感じました。

これらは、これからのグローバル社会で子どもたちが生きていくためには必要な力、全てだなというふうに思います。子どもが間違いなく変わるということを、はっきりやっけて感じております。

ちなみに、レゴ社の教材ガイドの下に、本校の取組を載せていただいております。

学校現場からやっけていまして、できたらお願いしたいなと思うことが何点かあるのですが、タブレットの台数をもっとあるとありがたいなと思います。1人1台の学校もありますし、高学年だけ1人1台のところもあります。

本校は730人ぐらいいるので、46台だと、本当にこのくらいだと順番待ちで、多い学校だけでも何とかならないかなという話をしています。

それから、今、Windows 10なのですけれども、バージョンアップができないと入らないソフトがありまして、今度の新しい理科の教科書では採択が決まったのですが、そこで入ってくる、使うロボットといいますか、教材が、今のバージョンではソフトが入れないということが分かっています。なので、できれば早急にバージョンアップをお願いできればと思います。

それから、ロボットがあるとないのでは全然違います。とにかく、物が動くということで彼らのやる気が変わってきますので、予算を配慮していただければと思います。

環境的なものとして、Wi-Fiより5Gの方が、これからの時代はいいよというふうに校内研究でお呼びした講師の方がおっしゃっていました。

その他、少人数教室と電子黒板ですとか、関係ないところではありますが、ホームページもCMSみたいな形になると、若者がもっと色々な更新をしていくかなというふうに思います。

簡単ではありますが、私からの報告をさせていただきました。ありがとうございました。

【坂本区長】

ご丁寧な説明を誠にありがとうございました。

ただいまの説明につきまして、ご質問またはご意見がございましたらご発言をお願いします。

いかがでしょうか。よろしいですか。

(はい)

【坂本区長】

それでは、本日のテーマでございます「魅力ある教育」の協議に入りたいと思います。

最初に、教育課題の認識について、まず、私の方から考え方を述べたいと思いますので、よろしくをお願いします。

最初に「板橋区コミュニティ・スクール」についてお話を申し上げますけれども、以下「iCS」という言葉を使わせていただきます。

地域でもiCSに対する関心は高いと感じておりますけれども、課題もあると認識しております。

先ごろ、ある町会長様から、町会の若返りを図るための取組を行っていることを伺いました。町会活動を継続するのもご苦労が多いと感じております。

本区の大変素晴らしい特色でもありますけれども、これまで青健活動や、あるいは環境行動委員会活動など、地域活動においては、町会・自治会の方々には大変大きく関わっていただいています。

しかしながら、町会等の人材を育てない限り、これまでのような活動も危ういとも懸念をしております。

iCSに関しましても、町会や地域の力が強いところだけが成り立っているという状況にもなりかねないとも考えます。

iCSが地域を変えていくぐらいの心意気が必要だとも感じています。

また、PTAの皆さんはiCSの重要な担い手でありますけれども、昨今ではPTA活動も様々な課題があるとも伺っています。

保護者の就労状況、また、お子さんや家庭の事情によってはPTA活動に参加しづらい場合もあるというふうに聞いていますし、PTA活動のあり方に対するご意見も様々であるとも聞いています。

その一方において、小中学校のPTA活動に熱心に取り組み、お子さんが卒業した後も、それぞれの学校でさらにご活躍している方々もたくさんいらっしゃいます。このような方々に、

これからの地域活動を担っていただきたいと考えています。

先ほど説明いただきました成増ヶ丘小学校のファーストレゴリーグの取組が好事例になると考えています。

英語ができる保護者、また、システムエンジニアの保護者など、各自の得意分野を生かして、子どもたちの夢をかなえる原動力を担っていただきました。このような取組が多くの学校にも広がることを大いに期待しています。

このiCSが着実にプロセスや成果を積み上げ、その中において次代につなぐ人材が育ち、合わせて地域の力も一層強まるよう、人材発掘、人材育成の場としても大いに期待をしております。

次に、「教育環境のICT化と学校における働き方改革について」を申し上げます。

職員室も、言ってみればクリエイティブな執務環境をめざすべきだと考えます。

教室の方には電子黒板や実物投影機が入りまして、ICT化が進む一方において、職員室においては、まだまだ改善の余地があるのではないかと私は感じております。

例えば、職員室の自由な回遊性のあるレイアウト、こういうものを見越したレイアウトの見直しや、また、職員室の大きな掲示板や、固定化された壁面に変わって、パソコンや投影機などのプレゼンテーション機器を活用した情報の共有や、職員会議を行うこともできそうに考えます。

また、先生方の働き方改革には、まずは職務環境の改善を図ることが重要とも考えます。

教育支援センターにおいては、これまでも色々なスキルアップの取組がされてきましたけれども、さらにデータセンター的な役割や機能をもっと。例えば、先生方からいただいた質問や、教育に関する色々なご意見、あるいはそれらの補足、こういうものをバックアップするような機能、これを持たせてはどうかというふうに考えます。

また、年度ごとに卒業生等がどのようなことをしてきたかなどのデータを管理するシステムもあれば、さらにその後の様々な人生の中でどういう学びを得たかということなどの履歴もあれば便利ではないかと思っています。

例えば、卒業式や入学式などの行事にすぐに使えるような会場のレイアウト、これも簡単なようで、実は大人数の方がテーブルで測ったりしながらレイアウトをやっておりますけれども、そういった会場のレイアウト図など様々な場面で使えるようなテンプレート化（ひな形）を作成してみたいかというふうに思っております。

あらかじめ「ひな形」を用意しておけば、あとはそれを複製して、少しアレンジをするだけ

で新しいものがつくれるというふうに感じております。

まず、70%は区立学校共有の「ひな形」を活用して、残りの30%を各学校の工夫や創意、努力によって特色を残していくというイメージで、独自性のあるものをつくっていただければと感じています。

先ほど、教育環境のICT化についての説明がございましたけれども、タブレットPCの活用拡大など、児童・生徒の学力向上を図る上でも、授業におけるICT化を加速していただき、教職員の働き方改革を進める上でも、校務のICT化の推進に取り組んで欲しいと願っております。

以上、概略でございましたけれども、私から意見を述べさせていただきました。続いて教育委員の皆様からご意見を伺いたいと存じます。

まず、初めに高野教育長職務代理者からお願いします。

【高野教育長職務代理者】

私から、板橋区コミュニティ・スクール、iCSについてお話をさせていただきます。

先日、学校の先生方、町会や青健関係者、地域コーディネーター、新たにiCS推進委員になられた方など、140名の方が参加して学校支援地域本部シンポジウムが開催されました。

今回のシンポジウムは、来年から全小中学校でiCSを導入するというに向けて、実際にiCS推進委員を体験するというものでした。

参加者の方々が4、5人のグループをつかって、子どもたちの豊かな学びを実現するための提案として「魅力ある学校づくり」、「運動会のあり方」、「体験活動の充実」、「校外トラブル苦情への対応」という4つのテーマで、実際に熟議を行いました。

そして、その熟議の中で出た提案について、それを具体的に実現させるためには、iCSの実働部門としての学校支援地域本部がどんなことをすればよいのかということ話し合い、実際にiCS推進委員を体験いたしました。

このシンポジウムを通して、私自身も実際にiCSではどんなことをすればよいのかということが分かり、具体的なイメージを持つことができました。

参加された方々も、今まで説明を聞いて、実際にどういうことをすればいいのかということが具体的にご理解いただけてなかったのではないかと思います。今回の熟議を体験していただいたこと、また、そこで出されたテーマを実現するためにはどうしたらいいのかということを実際に体験していただいたことで、iCSに関しての理解が深まり、また不安が少しは解消されたのではないかと思います。

また、同時にこのとき感じたことは、iCSという仕組みを持続可能な仕組みとしてつくり上げていき、その中で参加する委員の方たち、色々な方たちに参加していただくことが大切だと思いました。実際に、委員を体験することでiCSが何かということがよく分かると思います。

そして、町会ですとか青健ですと、各団体の代表の方が入っていますが、その方たちだけが理解するのではなく、それぞれの団体に持ち帰っていただき、広くこの仕組みを広めていただき、また新しい方にも委員を経験していただくということが大切なのではないかなというふうに感じました。

また、熟議の様子をご覧になっていた講師の方からは、板橋区のように地域の方や先生方、皆さんが熱心に本気で熟議をしているところは大変珍しいというお話をいただきました。このつながりと熱意は板橋の宝だから、ぜひ大切にしてくださいと何度も繰り返しお褒めの言葉をいただきました。

このシンポジウムに限らず、教育委員会では、保護者や地域の方と直接お話し合いをする機会をたくさん設けています。

私たちにとっては当たり前になっていたことですが、この皆さんが結びつき、前向きな気持ち、熱意というのが、板橋の宝というふうにお褒めいただいたので、ぜひこれをiCS導入に結び付けていってほしいというふうに思いました。

あと、平成30年度に10校、今年度からは全小中学校で、コミュニティ・スクール推進委員会が設置されていますが、昨年度からは幾つかの学校の推進委員会や勉強会に参加、傍聴させていただきました。

どの学校でも、いじめや不登校などを含めて、学校の現状について詳しく学校側から説明されていました。

また、学校の行事のあり方についても単なる報告ではなく、学校が困っていることの解決に向けて委員の皆さんでともに考えるという点が、従来の学校運営連絡協議会とは大きく変わっているなというふうに感じました。

また、ある小学校では全ての先生方も参加して、読み解く力の育成について熟議、意見交換をしていました。

そこでは、小学校の先生からは授業での様子を、また保育園の先生、中学校の先生からは、保幼小中一貫の視点でのご意見が出たり、また地域センターの代表の方からは、新しく地域にできる図書館についての情報が報告されていました。

保護者の代表の方からは家庭での様子などの報告があり、このiCS推進委員会ならではの様々な立場の方の意見が交流され、活発に意見交換が行われていました。

このように、iCS成功の鍵は、どなたに委員になっていただくかということが大変重要だなというふうに感じました。

先ほど、坂本区長からご指摘のあった人材育成について、成増ヶ丘小学校のファーストレゴリーグの例が挙げられましたが、ほかにも保護者の方がご自身の職業や経験を子どもたちにお話をしてくださったり、また、スポーツや学習の面でも得意分野を生かし、子どもたちの体験活動を支えていただいたりしている例がたくさんあります。

加賀中学校の英検応援講座は地域でも広く認知されるようになり、中学校のみならず、近隣小学校からの参加も増えているそうです。

iCS推進委員の中には、たくさんの地域コーディネーターの方が活躍されています。

P T Aなどで活躍された後、お子様が卒業した後も、自分の子どもだけではなく地域の子どものために、少しでもお手伝いできたらと学校でボランティアをしてくださる方がたくさんいます。

私がP T Aで活動していたのは今から20年以上も前になりますが、当時から委員のなり手が少ない、行事が多すぎるなど、P T Aのあり方について、みんなで真剣に考えた経験があります。

私は、それまで地域とのつながりをなかなかつくるのが難しかったのですが、P T Aの活動を通して、その後の町会や青健のお手伝いをするようにできたと思っております。

今のP T A活動については様々なご意見があると思いますが、P T Aの意義を考えながら、活動を継続した方々が、お子様が卒業した後も、寺子屋やおやじの会、学校支援地域本部など、ボランティアとして学校や地域の関わりを持ちながら活動を続けてくださっています。

これからも、こういった方々が学校支援地域本部やiCSの活動を定着させていく上では、学校を中心とした人の輪をつくっていただいて、さらに大きく広げていくことがとても大切なのではないかと思います、そういう活動に期待をしております。

以上です。

【坂本区長】

ただいまの高野教育長職務代理者のご発言に関連いたしまして、皆様からご自由に意見交換を行いたいと思いますけれども、ご意見のある方はどうぞお願いいたします。

いかがでしょうか。

【中川教育長】

よろしいですか。

【坂本区長】

中川教育長。

【中川教育長】

i C S 自体は、学校が活性化し、質の高い教育が実現されることが第一目的なのですが、町会や自治会、青少年健全育成地区委員会、環境行動委員会といった地域組織の活性化にもつながることを私も期待しています。

板橋区で生まれて、板橋区で育って、板橋区で住み続けている方ならともかく、他地区から転居された若い方々にとって、町会や自治会等はとても距離のあるものだと思うのです。

しかしながら、子どもさんが学校に入学して、子どものために様々な学校行事やP T A活動、あるいは、おやじの会の活動や学校支援地域本部活動、ときには町会、自治会、子ども会の活動に参加することで、保護者同士や多くの地域の方々と触れ合い、語らい、協働する中で、つながりが深まって、学校という枠組みから、より広い地域という枠組みの中で、保護者自身が居場所を見つけ、そういった方々が増えることで地域コミュニティの活性化が図られるのではないかと思います。

そういうところから、このi C Sというのは学校と家庭と地域がつながるといふ起爆剤になるという側面も十分あるし、そうあってほしいというふうに私も思っています。

そして、もう1つ、私もコミュニティ・スクール委員会設置のポイントは、ずばり人選だと思っています。

校長先生方においては学校の応援団になるに相応しい親和性や関係性や機動性が備わっている方を、ぜひ、保護者、あるいは地域の中から選ぶというところでの、まさに人材発掘、あるいは人材育成ということがポイントになるというふうに思っています。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

青木委員、お願いします。

【青木委員】

今の教育長のお話も含めて、それから高野教育長職務代理者のお話も、非常に私も同感するところが多かったのです。

私も熟議に参加させていただいて多く感じたところは、今の、その中心になる、恐らく校長先生が中心になることが多いかと思うのですけれども、その熟議の中でどうやって、様々な人たち、多様な人たちをどうやってファシリテートしていくかとか、コーディネートしていくかという力が本当に問われていくところになると自分も強く感じたところです。

ですから、iCS成功の秘訣は、そういった人材が、例えば校長先生が厳しいようであれば、地域の中から、そういったコーディネート力ですとか、ファシリテートできる人というのを中核に添えていただいて、皆様が楽しく、それぞれの皆さんの特技を生かしてiCSに関わっていただけるような、上手い集団、チームをつくり上げるということが非常に重要ではないのかなということを感じたということで、意見とさせていただきます。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

長沼委員、どうぞ。

【長沼委員】

7月13日に着任いたしました長沼と申します。よろしくお願いいたします。

iCSについてですが、私は、「学校ボランティアコーディネーション」という本を書いたことがございまして、その中で、この学校と地域をつないでいくような皆さんはボランティアなのですね。

ですから、このボランティアの皆さんが気持ちよく学校や地域のために一緒に頑張っていきたいと思いますような環境をつくる。

そのためには、今、青木委員がおっしゃったように、コーディネーション、あるいはファシリテーションはとても重要で、私も前回の情報交換会に参加しましたがけれども、非常にいい雰囲気、区全体でやっていこうよということが感じられたので、ますますこれが広まるといいなと思います。

注意が必要なのは、ボランティアというのは一切お金をもらわないということは、気持ちで動いている人たちなので、気持ちが、よりモチベーションが高まるような工夫ですとか、逆に言うとモチベーションが低下するようなことはなるべくないように、注意しながら、工夫しながら全体を進めていくということをぜひやっていただければというふうに思っております。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

ほかにかがでしょうか。

松澤委員どうぞ。

【松澤委員】

私は、板橋区で生まれ育っておりますので、地域の方との交流も長年やっております。

今、皆さんのお話を聞いていて、地域の方というのは本当に板橋愛が強い、素晴らしいことだとは思いますが、それが強過ぎる余り、先ほど教育長のおっしゃった、新しい方が入って来たときに、なかなかその不一致というのはあるのかなというふうに思っております。

その点で、学校を通したiCSを使って、そういったところが和んでいく環境をつくるということが大切です、板橋区にいらっしゃる方々というのは、すごく色々な才能を持った保護者がたくさんいらっしゃいますので、そういった方をたくさん集めていただいて、それを融合して、それで力を発揮できるような環境づくりが必要なんじゃないかなというふうに私は思っておりますので、今後iCSをつくって進めていく間に、そういったことも含めて、地域の板橋愛を新しい方にも持っていただけるようなものにしていただければいいのかなというふうに感じました。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

ほかにはよろしいですか。皆さんありがとうございました。

続きまして、青木委員からお願いします。

【青木委員】

それでは、私の方からはICT教育について、少しお話をさせていただきたいと思います。

先ほど来、坂本区長、それから西谷校長先生のお話の中にあつたように、ICT教育というのは非常に可能性の大きいものというふうに感じております。様々な可能性があるというところでは。

いうまでもなく、デジタル教科書を活用した授業の効率化、それから1人1人にそういった個別教育の充実というのにもICTは使えるかと思えます。

それから、さらに新しいところでは、反転学習と呼ばれるような、事前に指導しておいて、それで授業では議論、熟議を行う、こういったものにつなげるようなお話もあります。

一方、職員室では、先ほどよりお話のあった校務支援システムなどの活用で、いわゆる授業以外の部分の、「雑用」というのは言い過ぎかもしれないですけども、その辺を合理化していくところにもICTは十分に使えるというところ、それから、これからの可能性の中で言いますと、eラーニングというもの、これをインターネットの動画等で使うと学び直しができるというのが、高等教育などでは既に導入されてきております。

さらに、先ほど西谷校長先生の中にもありました、プログラミング教育の中で動くものと一体化させるということで、座学というのは不得意な生徒さんがいらっしゃいます。

しかし、例えば動くものと一緒にクラスの中でワイワイとやっていくというような授業の中では、非常に楽しげな授業に関わり、そこから興味、関心を持っていくという流れがあります。

動くものに興味を示す、それから手を動かすことに興味を示す、こういったものをプログラミング教育の中に導入していくことでは、学びに対しての新しい興味を持つようなことで、1つのきっかけになるというようなものも、1つおもしろいかなと思っております。

それから、ネットワークを利用するという中では、例えば不登校の生徒のケア、これもできるかと思えます。

先ほどご紹介した、例えばeラーニング、学校に出てこられなくても、ここの部分はeラーニングによって復習しておいてねというような話、それから、生徒さんのケアというところに、例えばスカイプですとか、ハングアウトmeetといったネットのコミュニケーションツールを使って、わざわざご家庭までいくことも大変大事ですけども、コミュニケーションを取って、今日はどうだったとかいう話をするだけでも生徒さんが学校に出てくるような1つのきっかけになるかなと思うのです。

さらに活用すると、先ほどのプレゼンテーションにもあった国際コミュニケーション、これを、インターネットを通じて海外の小学生、中学生とコミュニケーションをとれるような活用事例があろうかと思えます。

さらには、校舎内で新しいICT機器を活用しますと、例えばデジタルサイネージと呼ばれるような学校の広報を校舎に、こういった電子黒板だけではなくて、校舎自体に映し込むようなものもできる、例えばプロジェクションマッピングというような方法がございます。

こういったものを活用していくと、活用事例というのは無限にあるといっても過言ではないかなというふうに思っています。

先ほどの西谷校長先生の成増ヶ丘小学校でのプログラミング教育。私は、このFLLは、数年間運営の方に関わらせていただいた中で、今回の成増ヶ丘のこのPBL教育の1つのモデル

というのは、全国の公立小学校ではほぼ初となるような、先駆的なロールモデルというふうに私は見ておりますし、運営の代表者の方も、公立校からこういう事例が出てきてほしかったというのを私も直接伺っております。

そういった中で、今後は、世界へ出ていった彼らが i C S と関係するとすれば、中学校に行つて、いわゆるメンターという形で後輩の育成に関わってもらふということで、授業を手伝ったり、今後続けていくプログラミング教育に手伝いをしてくれたりというような仕組みができていくと、非常に合理化できて、i C S にもつながっていいのではないかなというふうに考えております。

このように、現場の先生方の努力が実を結びつつあるということは、言うまでもなく皆さんも感じられていると思います。

一定の成果は出たのですけれども、これは一区切りではなく、さらなる発展的な展開の第一段階にあるというふうに私は考えております。

これから、やはり重要になってくるのは、日進月歩の技術の進歩に伴う中で、最低限の I C T の機器、それから最低限のインフラの整備、そして最低限の教育コンテンツ、デジタル教科書なども含め、この三位一体に加えて、教員の I C T リテラシーの充実、このどれが欠けても I C T 教育の実質化や質的向上というのは、実現、実質化が非常に難しいのではないかなというふうに考えています。

幾ら P C やタブレットの数を増やしたところで、インフラ整備が欠けていれば、授業で使ってもネットのコンテンツが閲覧できないというような事態が、実際に高等教育の中でも起こってきております。こういったところで、授業の合理化は進められないというのは非常に問題なのかと思います。

教育コンテンツが欠ければ、教員が授業への活用というもののモチベーションも下がり、滞り、理解度の向上や、授業の効率化というのにつなげられなくなってくるような事例があるかと思ひます。最低限で結構です。

ですから、I C T 機器だけでなく、見落としがちなのがインフラ整備、それから教育コンテンツ、これの充実というふうに私は見ておりますので、ここにぜひともご尽力いただいて、板橋ならではの I C T 教育を実現していただきたいなというふうに考えております。

先ほど、西谷校長先生のお話もありました、今後 5 G といわれる次世代高速通信が主流になってきます。既に、導入も始まっております。ここで重要になってくるのがインフラ整備です。

5 G というのが導入されると、基地局のアンテナというのも多数設置しなければいけないと

いう課題が残っております。これは技術的にということです。

ですから、例えば、そういった通信のキャリアさんといったところと上手く連動して、先駆的な取組というような形で、この基地局をたくさんつくっていただくとか、というような形が必要かと思えますし、先ほどのレゴの事例では、新しくレゴのキットが実は開発されております。レゴスパイクというものなのですけれども、先ほどご紹介があったスクラッチで直接レゴのプログラミングができるようなものが、実はもう販売されることになってきております。

こういったものが、本当に日進月歩でどんどん出てくる中で、先ほど申しました最低限のICT機器というのは、その事由に合ったものの最低限という意味で私は申し上げました。

この辺のバランスを見極めて、ICTシステム自体の導入、効率化を図っていただきたいというふうに考えております。どうぞよろしくお願ひしたいと思えます。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

ただいまの、青木委員のご発言に関連いたしまして、ご意見のある方はお願ひ申し上げます。いかがでしょうか。

松澤委員どうぞ。

【松澤委員】

私も、ICTをやる上で今、青木先生がおっしゃったところが非常に大切だなと思っております。それをどういう順番でやるかということだと思えます。

なので、私はよく車に例えてしまうのですけれども、すごいスピードが出る車があっても走る場所がないと意味がないですし、運転技術がないと事故に遭ってしまいますので、そういった、先ほど言ったインフラ整備というところが重要なのかなというふうに私は思っております。

そのインフラを整備した段階で1人1人にそういった機種を入れるという方が、私はいいのではないかなというふうに考えます。

先ほど青木先生がおっしゃったところで、すごく重要なのは、その使い方、子どもたちや先生方に、その利点や注意点、それも伝えていく必要があるかなというふうに考えます。

そして、一番大事なのは、公共の場所にありますので、セキュリティの問題が最重点になってくるのではないかなというふうに考えます。その辺の順番を決めていただいて、もう10年後は当たり前になっていると思えますので、いつやるかということだと思えます。早くやった方が有利な世界だと思えます、ICTの世界は。

ですから、先ほどおっしゃったように、民間の企業さんとお話をしながらでもいいので、進めていただけると、魅力ある教育に板橋区がなれるのではないかなと感じましたので、ぜひよろしくお願ひしたいなと思いました。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

長沼委員、どうぞ。

【長沼委員】

I C Tにつきましては、2つございまして、1つは子どもたち向けの教育の中でどう進めるかということと、もう1つは教職員の皆さんがI C Tをフル活用して働き方改革にもつなげると、2つの視点があると思います。

1つ目の、子どもたち向けということでは、私どもは先日、来年度の教科書の採択をしましたが、ほぼ全ての教科でQ Rコードがついているということですし、教科書は全国共通のもので、恐らく全国、様々な学校で今後Q Rコードを読み取るということも授業の中でも行われる、あるいは家庭の中でもどうぞ、という形になっていくのだと思います。

ですから、松澤委員がおっしゃったようにこれは喫緊の課題で早めにそれが使える環境に移行しなければ、せっかくのいい教科書もそのよさが生かされないということになるんじゃないかと思います。

家庭でということになると、やはりその家庭と今度はインフラ整備の経済的な状況に左右あれてしまいますので、やはり教育というものは、そういうところをできるだけ左右されない環境を学校で用意するということが求められますので、家庭でということよりも、ぜひ学校でそれを実現するということなので、青木委員がおっしゃることに全面的に賛成したいと思います。

それから、教職員向けですね、これは働き方改革にも直結しまして、先生方がスムーズに校務支援システムもそうですけれども、駆使をしていただいて、いわゆる勤務時間の軽減になるような形で実現できるような、そんな環境を整備することも求められているんじゃないかなと思います。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

ほかにかがででしょうか。

高野教育長職務代理人。

【高野教育長職務代理人】

私は、学校の授業を拝見させていただいて、年々この電子黒板の利用が、すごく高度な利用の仕方を先生方がなさってくださっているなというのを感じます。

ほかの区からいらっしゃった先生方のお話を伺うと、この全教室に電子黒板がついているというのは大変魅力的で、これを生かさなければもったいないということをよくおっしゃいます。

皆さんがせっかくなつたこの電子黒板をこれからも有効に使うためには、様々な支援がまた必要なのではないかと思います。

先生方に研修を行ったり、またデジタル教科書などもこれからまた小学校の教科書が来年度変わりますので、そういった小学校では外国語、英語の授業が始まるので、そういうところでは、本当にこのデジタル教科書の活用というのが、大切だなというふうに思っております。

また、あと、先ほど西谷先生の方から、成増ヶ丘小学校での先生方のご希望としてタブレットをもっと増やしてほしいというお話があったのですが、これは成増ヶ丘小学校だけではなく、私が訪問した学校全てでこのお話を伺います。

先生方は、このタブレットを使って魅力的な授業を行っていく中で、なかなか台数が足りなくてやりたいことができない、また、あとインフラの整備、環境整備がまだ遅れていて、使える場所に限りがある、例えば体育館で使いたいのに使えないとか、色々と先生方がやる気を持って取り組んでいただく中でのご要望というのをたくさん伺っておりますので、ぜひそういう先生方のやる気を支援していくためにも、現場の声を大切にしていきたいなというふうに思っております。

【坂本区長】

ありがとうございました。

ほかにかがででしょうか。よろしいですか。

(はい)

【坂本区長】

では、次に移りたいと思いますけれども、長沼委員からお願いします。

【長沼委員】

それでは、私は元私立ですけれども中学校の教員をしておりまして、現在も大学で教員養成をしておりますので、教職員の働き方改革について、考えを述べたいと思います。

先ほどの担当課長さんからの資料説明にもありましたとおり、ここにありますように、まずは過労死ラインを突破しないように全員するという目標にこれはなっておりますが、資料を見ますと過労死ライン突破の教員の割合が、小学校は約4割、中学校6割ということですが、国のデータでは小学校は3割、中学校6割ですので、これは板橋のデータでしょうか、東京都でしょうか、とにかく相当、小学校に関しては多いということが分かりますので、こちらを喫緊の課題として目標ゼロにするということを、これは全面的に総力を挙げてやらなければならない。板橋区から過労死の教員を絶対に出してはいけないという思いと決意のもとで進めていただければというふうに考えています。

今、私は教員養成をしている立場から、この働き方改革をある種の危機感を持って捉えています。それは、若い人が残念ながら教員を選ばなくなってきたという傾向に、今入ってきているということがございます。

例えば、今年の東京都教員採用試験では、全体の倍率は3.8倍でした。しかし、これは校種によって差がございまして、中高は5.2倍ですが、小学校は2.4倍というふうでございまして、3倍を切っております。3倍を切りますと、質の問題、危険水域に入ると言われておりますので、東京都全体でもこれは課題意識を持たなければならないということでございます。

ただ、この倍率というのは受験生の数だけではなくて、採用者の数によって左右されますので、受験生の実数を見ていくとどうなるかということでございますが、今年は約1万2,000人が全校種で受験をしておりますが、5年前は1万8,000人ございました。

つまり、この5年で3分の2に希望者が減ってしまったということです。

都内の教職課程を持っている大学の教員何人かに聞きましたが、聞いた範囲の全ての大学で教職課程の履修者が減っているということでした。

ということは、これから4年間減る可能性があるということでございますので、相当これは質の問題に影響してくるだろうと私は思っております。

理由は幾つかあるのですが、1つはそもそも若い人の数が減ってきている。

これは少子化の影響で、もう22歳の大卒の時点での人口にも影響してきているということですね。企業では、人が足りないから外国の方を雇おうということで慌てていますが、それは学校教育も同じことが言えるんじゃないかと思えます。

2つ目に、労働環境を改善しなければならないということで、先ほど区長さんからもおっしゃっていただいたように、これを板橋でも広く進める必要があります。

3点目の理由としては、一般企業の就職は比較的いい状況になってきまして、それはそれで、

つまり人が足りていないわけですから、若い人が採用されるということになってきていますから、企業の方に行きたい人が増えてくるだろうということで、総体的に教員になりたいという数が減ってきているという、この3点の要因がありますから、こういったことを何とか食い止めながら、若い人が教員になりたいという環境を整備する必要があります。

具体的に4点だけ、時間の関係で申し上げます。

1つは、資料にございましたが、スクールサポートスタッフというのを、これはかなり早く数を確保して、全校配置でいいと思いますが、やるべきだと思います。

これは色々な自治体でも進んでいまして、このスクールサポートスタッフは色々な形態がありますが、一般の教員向けというのもあります。23区のある区ですが、副校長の補佐というのを、非常勤職員として1億4,000万円の予算で全小中学校に入れました。月16日勤務で、1日5時間勤務ということでございます。

副校長になぜ入れるかという、国のデータで出ておりますが、一番忙しいのが副校長さんなのですね。だから、ここに入れるというのは非常に先見の明があると思うのですね、この区が。

話を聞きましたら、副校長先生は本当に生き生きとして、「随分助けられています」という感想を漏らす方がほとんどでした。

ですから、こういうことをやった区もありますので、どこに行って啓発行動をするかというのは色々あっていいと思いますが、例えば副校長さん、あるいは一般の教員にサポートしていく、支援を入れるということは、早くやらないといけないと思いますし、東京の中でも、先ほどのICT機器の黒板に関しては非常にいいという話がありましたが、「労働環境は板橋はいいよ、異動するなら板橋だよ」と言われるようになるぐらいでちょうどいいのではないかな。それを、私は「教育の板橋」と言うのでしたら、先生にとっても魅力的な環境もあるのだということを、ぜひ示していきたいなというふうに思っております。

2点目ですが、やはり部活動です。

特に、中学校に関しては部活動のことで勤務が多くなる、頑張れば頑張るほど土日に練習試合や大会がある。勝てばまた来週あるということでございますので、部活動指導員、これは法改正で学校職員として認められたものですが、単独で校務もできるし、単独で大会引率もできるという仕組みですから、これも、もちろん人件費がかかることではありますけれども、実験段階と言わずに、たくさん数を導入して、先生方を支えていく仕組みをつくっていく必要があるんじゃないかと思います。

それから、3つ目はいわゆる留守電です。

自動応答装置を入れていくという電話の問題ですが、これもまだモデル校だけと思うのですが、全校配置をした方がいいと思います。

ほかの自治体で全校設置をしたところに聞きましたけれども、本当に夜の時間帯が随分楽になった、本来やるべき仕事ができるようになったということで、恐らくこれも電話をかける側の気持ちを考えれば分かるのですが、かけると出るということは、皆さん電話しようというふうに思いますので、でも、そうじゃないということが分かれば電話する側も考えるのです。

考えて明日にしようとか、学校がやっている昼の時間に電話をしようというふうに工夫されますので、これは本当に環境整備という点ではすぐにでもできるのではないかなと思いますので、1億何千万もかかりませんので、すぐに実現可能なものだと思います。

4点目ですが、校務支援システムというのが既に導入されているとは思いますが、これはいかがでしょうか、東京都全体で共通になっているのでしょうか、あるいは自治体ごとなのでしょうか、後ほどお話をいただければと思いますが。というのは、一昨日、長野県の小学校にゼミ生と一緒に行ってきました。

そこで、校長先生いわく、長野県では県全体で同じ校務支援システムを入れると言っていました。

理由は簡単です。なぜならば、異動しても同じシステムでできるのだと、これは大変やりやすいということで、まずは実験段階で3つの自治体と言っていましたが、恐らく全県で同じシステムを導入して、異動してもスムーズに先生方が使いこなせるようにするそうです。

ですが、これは、ここではなくて、もちろん東京都の教育委員会さんに関わっていただければいけない問題であります。一応、情報共有という意味で皆様にもお伝えをしておきたいと思います。こういうことをやっている自治体はありますので、ぜひ「教育の板橋」に向けて、働き方改革を全面的に進めていただきたいというのが私の考えです。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

それでは、ただいま長沼委員のご発言に対しまして、ご意見のある方につきましてはどうぞお願いします。

いかがでしょうか。

中川教育長。

【中川教育長】

ありがとうございます。

実は、東京都の人事制度というのは、かなり変わってきて、主任教諭、主幹教諭あたりは、実は今までは自分がどこに異動するか分からなかったものが、公募制として自分がそこで教員をしたいというところで、できるようなシステムになってきています。

そういう意味では、先ほどの長沼委員がおっしゃっていたように、選ばれる板橋区というところで、坂本区長がよくおっしゃるように、東京で一番住みたくなるまちと同時に、私も、先生方が東京で一番働きたくなるまちというところでは、ハード面とソフト面、両面もあると思いますし、先生方が希望してくれるというところで、教員は子どもと関わっていきたい、それから質の高い授業をしたい、そこに多くの時間が費やせるような、そういうことが一番の望みで、遅くなったりすることというよりも、本来的に教員になりたいというのは、授業をして、子どもたちと関わりを持って、また保護者と関わりを持って、成長させていきたい、それとともに自分もそれに向けて自己啓発する時間を持ちたい、こういったことが基本的にはあると思うので、私も委員がおっしゃっていただいたように、できる限り先生方が質の高い教育、あるいは授業を行えるような時間を確保していくということと同時に、そのためにも、先生方が自ら学び続けることのできる環境づくり、あるいは支援というものが必要であるということで、今、長沼委員がおっしゃっていただいたような4つも含めて、さらに教育委員会としても力を入れていきたいと思っています。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

松澤委員。

【松澤委員】

私は、先生方のお話と、地域の保護者の方のお話を聞いた中で、先生方は、働き方改革といっても、すごくやりたいことが多すぎる、でも全部でき切れないというところを聞きましたので、1つ目は、今日は校長先生もいらっしゃっていると思うのですが、学校全部でサポートできるように、1人の先生、忙しい先生にみんな回ってくるという傾向もあるかと思しますので、その辺を分散していただきたいなというふうに思います。

そして、その頑張った先生にも、ちょっと抜いた方がいいよというようなことも必要なので

はないかなというふうに少し感じました。

もう1つは、長沼委員がおっしゃっていたところなのですが、先生方が崩れてしまうというのですか、授業が上手くいかなくて休んでしまったり、離脱してしまった場合、副校長先生が授業に入るケースも多いです。

そうしますと、副校長先生は普通の業務に加え、その先生のサポートにも回らなければいけない事例が結構挙がってきています。

そして、今後4年間、先生のなり手、先生の技術の低下というのを見込んでいる中で、そういったサポートをする、先ほどおっしゃっていたような副校長先生をサポートするところや、部活動の指導員をサポートするところが法律上可能であれば、そこを私はやっていただくのが一番効果的なのではないかなというふうに感じました。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

青木委員どうぞ。

【青木委員】

長沼委員のお話は、非常に意義のある話だと思っております、働き方改革ではこういったことが非常に重要なのだと思います。

私は、職場の関連では副校長先生と同じような業務を仰せつかっているものですから、そういう経験上から申し上げますと、2つ、ここにある資料の中で評価していただきたいというのがあります。

これは、全般的にということですが、多くの先生が業務の中でストレスに感じるということのを軽減してあげるというのは大事な話だと思います。

幾つか課題が挙げられている中で、まず第一、私自身もそうなのですが、トラブルですとか、個人的な相談というものに対するのには非常にストレスがたまりやすく、対応も難しいというのがあります。

何が言いたいかというと、スクールロイヤー、これの充実が非常に大事だというふうにも感じております。様々な父母からの相談ですとか、あるいは苦情ですとか、友達同士のつき合いとか含めて色々あります。

当然、それは教員として対応しなければならない部分があるのですが、それ以外のプライベートな悩み等が出てきたときに、こういうスクールロイヤーの方が法律的にというような

形で対応していただけると、これは随分ストレスの軽減にもなって、ストレスがなくなると、働き方の中でも、同じ働いていても、やりがい、生きがいというのにつながると思うので、この辺の充実。

それから、もう1点申し上げますと、文書の簡素化というのがあります。重点施策の3番にあるように、学校に提出を求める文書の簡素化、調査依頼業務の見直しというところで、この合理化がありまして、恐らく校長先生もそうだと思うのですが、書類書きという時間を使うというのが随分あるんじゃないかと思います。これは、校長先生だけではないと思います。多くの先生。

ここが例えば書式を統一するとか、例えばICTを使うとすると、入力の手間が非常に省けるとかというような定型のような形、データセンター方式ですとか、先ほどもお話があったようなものに、それを統一化していただくよう流れができると、非常にやりやすいのかなと思いついて、長沼委員の繰り返しになってしまうかもしれないのですが、その辺の細かいところが教職員のいわゆるストレスを軽減して、働き方というのに対しての効果、これを感じていただけることになるのならと思って申し上げました。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

【中川教育長】

すみません、1つだけよろしいでしょうか。

実は、先ほど坂本区長から、職員室のレイアウトの件が出ていたのですが、それに関して、実はハードがソフトを変えるという言葉が耳にします。本区においても赤塚第二中学校、あるいは中台中学校の教科センター方式という校舎改築に伴って、先生方や生徒の意識変革が図られ、学校運営や授業そのものにも大きな変容が見られています。それに伴って、学力向上等に非常にいい結果が出ています。

その考え方を生かして、先ほど区長がおっしゃっていたように、職員室のレイアウトですが、実は、新しい学校づくり課の方で、千葉工業大学との共同研究という形で、現在、職員室の実態に関するアンケート調査を、これからですが、区内の小中学校で行っていきたいというふうに思っています。

その結果に基づいて、学校現場の声も生かしながら、職員室の環境改善といったものが教職

員の働き方改革につながっていくようなことも検討してまいりたいと思っています。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。よろしいですか。

(はい)

【坂本区長】

ありがとうございました。

それでは、次に松澤委員からご発言をお願いいたします。

【松澤委員】

私は先ほどから発言しておりますので、短目にしたいと思います。

魅力ある教育というところと、その実現についてなのですが、私が考える10年後、板橋区について、教育は、「未来をはぐくむ緑と文化のかがやくまち板橋」というところをめざして行くのではないかなというふうに思います。

緑というのは環境づくりになるのではないかなというふうに思います。

そして、文化というのは、古いもの、伝統のあるもの、そして新しいものが融合されて変化するというようなもの、そして、それが輝けるまちへ、そんな未来を育てていく、そんな教育課程ということができればすごくいいのではないかなというふうに思います。

私は、新しくつなげていく、次の世代につなげていくことや、古いもの文化を残す、先ほどもiCSの話で出たのですが、昔から住んでいる方たちも古い伝統や文化、そういう大切な板橋の財産を次に残す、それは新しい人たちがやることではなくて、古い人たちが次にちゃんとつなげていかなければいけないということをもっと発信していかなければいけないというふうに思っております。

そして、新しい人たちは、今度はそこに教えていただくというか、その伝統や文化を受け継いでいってほしいなというふうに私は思っております。

それが融合したときに、板橋区としてすごく素晴らしいものになるのではないかなというふうに思います。

10年後の未来を動かす、そういったことが大きな原動力になっていって、みんなが力を合わせる、志を持って板橋区の教育を変えていくというようなことを、教育に関わる全ての人が思っていていただくところからスタートしていただければいいんじゃないかなというふうに思いま

す。

そこは、今まで、先生が生徒、子どもたちに教えるという観点から、先生も生徒もともに学び合うというようなことをiCSなどを通じてやっていただく。先生方が子どもたちからも学ぶこともそうなのですが、一番大切なのは、保護者が先生のことを育てていただきたいというふうにするのです。

新しい先生たちが増えていく一方で、ベテランの先生の方がよかったなどという声も聞かれますけれども、板橋区の今後の教育を支えていただくのは、先生方であると私は思うので、そういった先生方を保護者も育て、そして、保護者自身も子どもから学び、先生方からも学んでいく。ともに学んでいくということが実現できることが一番大事なのかなというふうに思います。

しかし、なかなかつなげていくことや、つながるということはすごく難しいことで、その大切さは分かりますが、それをどうやって実現するかというところはすごく難しいと思います。板橋区としての例を見ていくと、例えば施設間の連携、例えば、児童相談所や行政や学校が別々であってはいけないのですよね。

なので、公園や福祉施設や学校、公共施設などが、今後は一緒になって話をしながら、ここにこういったものを進んでつくっていきましょうと、全部別々の部署で、1つずつ建物を建てるという概念から、1つのものをみんなでつくっていくというような、そういった考え方で、例えば、私は緑の仕事をしておりますけれども、公園の中に学校があってもいいんじゃないか、例えば公共施設があってもいいんじゃないか、今度の中央図書館もそういった状況でできますし、そういった中で学ぶ、しかも自分たちだけの学ぶのではなくて、一般の区民や学生や行政がみんなで学んでいけるような、そういった空間づくりというのも必要なんじゃないかなというふうに思います。

学校というところは、一番大事なのは避難場所にもなりますので、危機管理ともつながっていかなければいけないし、全てのところに共通しているんじゃないかなというふうに思っております。

その学校を支えている先生たちが生き生きと、今度、先生になりたいという人が増えていくことが板橋の魅力ある創出につながるんじゃないかなというふうに思っていて、先ほど区長がおっしゃった、ひな形づくり、テンプレートづくりというのは非常に大事だなというふうに思っております。

それは、板橋区としてのテンプレートもそうなのですが、先ほど長沼委員がおっしゃ

っていた東京都全部が共有できるようなものができるのであれば、それにもリンクできるようなひな形ができると、学校の先生がどこか回ってきても、また板橋区に返ってくる、板橋区はデジタル黒板など、すごくICTが進んでおりますが、埼玉に行くとなのです。ないところに行った授業がまた大変だという声も聞いております。また、帰ってくるとまたデジタル教科書だったりするわけです。

そういったところも先生方は結構難しいと思いますので、そういった先ほどのひな形づくりで共有できる部分は、板橋区独自でつくるということも大切なのですが、そのひな形が、例えば東京都などと共有であったりするといいのかなというふうに思います。

最後に、板橋区によさというのは、私はずっと住んでいて、色々な地区で色々な個性があることです。

板橋区で1つのものをつくるという観点はすごく大切なのですが、板橋区の各地域の人たちのよさを全部包摂して、その全てが集まった状態が板橋のよさになるんじゃないかなというふうに私は思っておりまして、今度また、史跡公園などもできると思いますけれども、板橋も地域ごとの、そこの善し悪しを個性として出していただいて、それを板橋区がまとめて、こんなよさもありますよということを、子どもたち、保護者、区民、みんなが学んでいけるように、生涯学習としてはそういった、最後まで板橋というものを学び、東京を学び、日本を学ぶことで世界に出ても通用できるような人が育っていくのではないかなというふうに思います。

私は、最後に農業者として、農業者の視点から見て、育てるといふことの難しさと大切さというのを知っておりますので、長い目で見て先生というものを育てていただき、保護者を育てていただいて、地域の若い世代を育てていただいて、板橋を魅力ある教育の板橋ということにしていいただければいいなというふうに感じております。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

ただいまの松澤委員のご発言に対しまして、ご意見等ございましたらお願いいたします。

いかがでしょうか。

青木委員、お願いいたします。

【青木委員】

非常に、板橋区具体的なお話をしていただいたなと思っております、お話を伺いながら、1つ思ったのは、区民の方、それから新しく入ってきた方のイメージをどう変えていくかとい

うお話なのかなと思います。

思い出したことがあるので1つだけお話させていただくと、実は私の職務の場というのは、千葉の船橋というところにありますが、そこは宅地開発されて、大学の東側というところに新しく住宅がたくさんできたという経緯があります。このときは、実はチャンスだと思ったわけです。

いわゆる、この地域を学園都市化したいというプランが1つあって、できるだけ地域連携という形で、新しく入ってきた方たちと大学との色々な連携事業を展開させていただくというのを、積極的にやらせていただきました。

非常に短い期間ではありますが、まち全体のイメージが、中核に大学なり学校があるという意識をだいぶ持っていただけるようになって、何かあったときに皆さんに相談に来ていただけるようになったというのが、1つの大きな成果なのかなというふうに思っております。

そういうところから考えると、板橋も新しいマンションができたりとか、それから今後、大きいのは、先ほど松澤委員も言われたような教育科学館と中央図書館、ここの一体化、これができます。

こういったところを核に、ほかの区では教育科学館なんてないと、これは杉並の校長先生も言われていましたけれども、こういったものを上手く生かしていくことで、学園都市というのは言い過ぎかもしれないですけれども、教育に本当に力を入れているという、イメージが変わってきたぞというのは従来から住んでいる方、それから、新しく入ってきた方に、ここは教育に対して力を入れているというイメージをつくり上げるのにはよいモデルプランがあるのではないかなというふうに思っております。

そういった意味で、松澤委員が言われている「地域ごとに」という戦略は非常に大事なかなというのを感じたので、あるいは防災の観点から、消防や警察との連携というのも、忙しいとは思いますが、i C Sの中で1つ検討していただいて、安心・安全、そして学園都市化、この辺のイメージを住民の皆さん、区民の皆さんに持っていただけるといいのかなというのも個人的に思いました。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

長沼委員。

【長沼委員】

松澤委員のお話から啓発を受けまして、文化と空間づくりということをおっしゃられたと思うのですが、働き方改革も含めてですけれども、i C Sも含めて、変えたことについては、それを可視化して区民の皆さんに見ていただくというか、納得していただくために、工夫をした方がいいんじゃないかなと思います。

例えば、本当に今思いついたのですが、「絵本のまち板橋」というのをこれからつくろうとしているのだとしたら、これを様々なところに出していく。例えば鉄道会社さんと協力をして、どの駅に行っても何か絵本が置いてあるだとか、絵本の何か、例えば、その世界が描いてあるとか、あるいはロゴマークをつくる。そのロゴマークは大人がつくるのではなくて、幼稚園や小学生に募集をして、その中から選ばれたものをロゴマークにして、それをあちこちに貼っていくとか、そういう目に見える形で、「教育の板橋」とか、「絵本の板橋」というのを、まさにそれも文化ですから、松澤委員が板橋愛に燃えているように、恐らくたくさんの方がいらっしゃると思うので、そういう方にも理解していただけるような施策が必要なんじゃないかなと思いました。

以上です。

【坂本区長】

ほかいかがでしょうか。

高野教育長職務代理者お願いします。

【高野教育長職務代理者】

小学校の総合学習の授業を参観していたときに、板橋区の魅力を自分たちで発信しようというような授業だったので、その中で、何回か授業を重ねていった中で、最初は花火とか東京大仏などの、行事だとか建物とか、そういうものについての意見が多かったのですが、まちに出て色々なところを尋ねていった子どもたちが、「最終的に板橋の魅力って地域の人たちの温かい気持ちだよ」、「僕たち子どもをすごく大切に思ってくれているよね」、「これが板橋の魅力だと思う」というような発言が出たときに、大変嬉しく思いました。

先ほど、松澤委員が、古い人から新しい人が受け継いでつなげていくということなのですが、まちの人の子どもたちと一緒に育てていこうというような、そういう温かい気持ちとか、そういうものをぜひ大切にして、次の世代の子どもたちの中にも、そういう板橋のよさが受け継がれていったのかなというような気がしましたので、こういった板橋区のよさをぜひ次につなげていきたいなというふうに思っています。

【坂本区長】

ありがとうございました。

ほかによろしいですか。

(はい)

【坂本区長】

ありがとうございました。

続きまして、中川教育長からお願いいたします。

【中川教育長】

今年度に入り、私は「教育の板橋イノベーション2020」という大きなテーマを掲げています。実は来年度、板橋区の教育委員会としては、「小中一貫教育、保幼小接続教育」、そして先ほどから挙がっている「板橋区コミュニティ・スクール」、さらに「教職員の働き方改革」、この3本の柱を本格的にスタートするという意味合いで、非常に重要な1年であるという意味合いをこめています。新しい学習指導要領は、子どもたちが活躍する2030年の社会をバックヤードにつくっているのですが、もう1つ、実は2030年の社会を意識している大きなグローバルな施策として、SDGsというものがございます。

これらのことも踏まえて、板橋の教育委員会としては、SDGsの視点を踏まえた教育の推進ということも同じように大事にしていきたいと思っています。

SDGsの基本理念は「誰ひとり取り残さない—leave no one behind」。そして、その中で17の目標の中の4に「全ての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」とあり、ダイバーシティとインクルージョンの考えが非常に密に詰まっています。ここにまたさらに10の大きな細目が入ってきているわけです。私は、質の高い教育の確保といった場合、大きく実は4つ、今、皆さんのお話を聞いてもう1つ入れたかったですけれども、1つ、学校教育においては授業というものが非常に重要で、「分かる」、「できる」と、もう1つの「使える」、学んだことを活用するというような意味合いも含めて、その主体である教師の指導力の向上ということで、幸い、教育支援センターのもとで、研修・研究機能が充実しているということ、大変嬉しく思っています。それと同時に、先ほど来出ているように、教師が板橋で教員をやりたいという、そんな働き方改革ということをお大事にしていかなければいけない。そのための環境づくり。そして、2つ目は教育環境の充実ということで、ICTの充実、及び指導スタッフの充実、それから働き方改革ということも当然入ってくると思います。

2つ目は、「誰ひとり取り残さない」という視点から、昨今配慮を要する、あるいは温かい支援を要する子どもたちが増えてきているという現実からの特別支援教育の充実、それから日本語を母語としない子どもたち、つまり外国籍等の子どもたちへの教育の充実ということで、全ての子どもをフォローする態勢づくりということが大事で、実は今年度、この7月からですが、学務課の方で日本語の全く解せない子どもたちを集めた日本語集中講座等も始めさせていただいております。また、ここもICT機器、特にタブレットが非常に有効に機能するというふうに考えています。

それから、3つ目は不登校対策ですけれども、教育機会確保法が施行され、これまでのように必ずしも学校に復帰することが主目的ではなく、子どもたちが社会的に自立をめざす、そして、できる限り、引きこもりに入らないような子どもたちの居場所を、今現在つくっています。

適応指導教室板橋フレンドセンターというところと、9月から、今度は成増のまなぼーとに成増フレンドといったものをつくったり、生涯学習センターまなぼーとのi-y-o-u-t-hを活用する、学びiプレイスをつくる、そういった様々な寄り添いといったこと、そして家庭教育支援チームとあって、民生・児童委員や主任児童委員の皆様のお力も借りながら、地域の方にご尽力いただいて、将来ある子どもたちの復帰の道を確保していくことが重要と考えています。

そして冒頭でもお話がありましたように、子どもたちが活躍する場、Society 5.0を視野に入れますと、情報化教育というところで、ただ、ここもAIを活用する能力はもちろんなのですが、実はAIに代替できない能力ということで、国立情報学研究所の新井紀子教授等も含めて、今言われているのは、きちんと読み解く力を育成することが大切であると言われていています。書かれてある事柄をきちんと読み取って、判断して、それをアウトプット、表現していく、そういった力、それから先ほど西谷校長先生がおっしゃっていた、私も実は試行錯誤する力、これはプログラミング教育の大きな効果があって、日本の子どもたちは、どちらかという間違えたりすることは恥ずかしいという思いで、なかなかトライ&エラーができない、こういったこともこれからのグローバルな世界では重要なものになっていきますし、大事にしていきたいと思っております。

その中で、実は、先日ある中学校に行ったときに、とても素敵な授業で、これは英語の授業なのですが、中学3年生が、外国人に日本のよさを伝えようということで、1人1人がタブレットを使って、自分のプレゼンテーションを自分の顔を見ながら英語でスピーキングの練習をしていました。全て1人1台持っていますので、こんな形で、自分の表情を見ながら進めているのです。本当に生き生きとしていました。英語で話すことが苦手とっている、この

間の学力調査の結果では到底考えられないような生き生きしたものでした。

そして、左側、先生は画像合成で全体を把握して、子どもたちの様子を見て、なかなか進まない子に個別指導をしていく、そして子どもたちはお互いにペアで成果を見い出すというような、こういう授業が必然に進められています。

これは中学校のプログラミングですけれども、これも隣同士で自然な会話、つまり、何か課題があると、我々は意図的に「友達と話し合っごらん」ではなくて、課題があるとその課題解決に向けて試行錯誤するうちに自然に隣の子と楽しそうに学んでいる姿、本当に素敵だなという場面がありました。

こういったことが、ICT機器の非常に有効な活用なのかなと思っています。

それから、個別最適化ということで、T-L型指導、ティーチが教える・子どもが学ぶ（ラーン）という指導から、F-S型指導、教師がファシリテートしながら子どもがスタディ探究していくという指導に、多分、基礎的な学習、いわゆる読み書き、特に計算分野ということなのですが、見ていただきたいのは、これはあるAI型教材なのですが、例えば $4x + 3 = 2(x + 4)$ という問題で、実際に子供がタブレットで解答して誤答を出すと、その誤答を克服するようなことを、AIが間違いを分析して、その子に合った問題が次に出される、こういうソフトが今非常に増えてきています。恐らくこういった形で、今までのように一斉指導の中で、先生が一方向的に教えていく授業よりもかなり効率がいい、そして先生はどうするかというと、AIが1人1人の子のメッセージをくれます。例えば、「手が止まっているようです」とメッセージが出れば、先生はその子のところに行って、個別に指導する、こんな形が先々広がっていくというところでのICTの活用が見られることでしょう。

実際に行っている学校では、日頃は、基礎・基本的な学習の内容については、こういうタブレットで進めることによって、学習に要する時間が半減して、生徒の学習力も向上して、残りの時間にいわゆる探究的課題解決型の時間に充てることができると言われています。

いわゆるトップアップと言われている、できる子たちが待たない、あるいは、できない子たちがそれに合ったような学習がこれから可能になっていく、それがこれからの教育現場にも出てくると思われます。

そういう意味では、ICTは学びのマストアイテムになっている。先ほど青木委員が言っていたインフラとかコンテンツやICT機器が、三位一体で初めて教育に効果を発揮するんだと感じています。

そして最後に、iCSの導入によって想定されるということで、今までのように学校の教育

活動等は先生だけが決めるのではなくて、多様な方が入ることによって地域性とか意外性とか独創性や専門性、そして保護者や地域の方々が学校を理解していただく場につながる。それは学校の努力も必要で、学校はできる限りの情報を発信していく。そして、子どもたちにとっても、様々な方と出会うことによって、郷土愛の醸成だとか、自分が褒められたり認められたりすることで、自己肯定感の高揚につながっていくというよさが生まれていく。

そして、冒頭に申し上げたように学校をプラットフォームにして地域コミュニティが図れる、その意味では、ぜひ、そのメンバーの人選といったところに校長先生方がこだわっていただきたいし、先ほど青木委員がおっしゃったように、色々な地域の方々に人材を選ぶ際のアドバイスをいただく、こんなことが必要になってくるのかというふうに思っております。

以上です。

【坂本区長】

ありがとうございました。

それでは、中川教育長のご発言に関連いたしまして、ご意見のある方はどうぞお願いいたします。

いかがでしょうか。

青木委員どうぞ。

【青木委員】

非常に興味深いプレゼンテーションをありがとうございました。

特に、個別最適化の学習の話で、F－S型指導というのはこれから大事になってくるかと思っています。

先ほどのICTの中でも触れさせていただいたところなのですが、今の子どもたちというものに恐らく大切なのは、興味や関心の喚起という、そして、自らの学びにつなげる場所というのは、実は教員ができれば、後はインターネットの情報なんかで勝手に学んでいくというところがあるかと思っています。

そういった意味で、自ら学んで、先ほどの例にあったように、2人とか3人とか、チームでの学びにつなげていくようなところまでを学校の中で、授業の中でやっていただいて、後は、多様なコミュニケーションを本当にICSが全てやってくれるんじゃないかなと思います。

年齢、性別というか、それから本当に多様な知った人のコミュニケーションというのが、本当は社会の中で一番大事なことだと思うので、これがICSになるところかなと思っておりますので、その辺に生徒さんたちをどんどん参画させるというところが、最終的には板橋

区が育てたい子どもたちの育成につながるのかなと思いました。

以上です。

【坂本区長】

ほかにいかがでしょうか。よろしいですか。

(はい)

【坂本区長】

長時間ありがとうございました。

本日共有いたしました課題等につきましては、教育施設を初め、板橋全体としてどんな施策ができるのか検討してまいりたいと考えております。

今後とも、「板橋区教育大綱」のもとに、区長部局と教育委員会がより綿密に連携・協働して着実に教育施策を推進することによりまして、地域、家庭、学校が一体となって展開されます「魅力ある学び支援」ビジョンの実現に向けた取組を一層推進し、これからの日本、板橋区の発展を担う人材を育成していきたいと考えております。

教育委員の皆様におかれましては、より一層のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

本日は、大変お忙しいところお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。

これをもちまして、令和元年度板橋区総合教育会議を閉会といたします。

皆様、ありがとうございました。